



## 未来の地球のために —私たち一人一人ができること—

立山町立雄山中学校 3年 原 好未

未来、私が大人になって働いている未来、おばあちゃんになっている未来、私がこの世からいなくなった後の未来。私がこの世にいなくなっても続く未来。未来とは遠いようで近いと思う。でも未来は自分次第でいろいろなことができるそんな希望にあふれるものでもあると思う。そんな希望を誰にも壊してほしくないし、相手の希望も私は壊してはいけない。

「差別」これが相手の希望を壊す一つの武器だと思う。女だから、若いから、黒人だから、貧乏だから…。書き出したらきりが無い。私が思うに差別とは自分でつくった線で相手を区切って自分との違いを見つけ痛めつけているということだと思う。

7月、戦後最悪といわれた殺害事件が起こった。障害者施設の入所者19人が元職員である男に殺害されたというものだ。その男は逮捕時「障害者なんていなくなればいい」と供述した。区切りの溝を深く太くし、相手の存在価値さえも、自分で決めている。本当に障害者は犯人の男、私とも違いはあるのだろうか。私もふくめみんな母親から生まれ、食べ物を食べ、日々を過している。けれど見た目や考え方、何を感じるかまったく同じ人なんていない。その差を積み重ね自分と誰かを比べ線をひく。でも忘れないでほしい。線で区切っても、底ではつながっている。表面上きれていても、底はつながっている。みんな同じなんだ。みんな同じ価値なんだ。

私たちの未来、これからの未来みんな同じように前へと進んでいく。誰かが止まっても進んでいってしまふのかもしれない。でも私は振り返って、止まった人に手を支しのべる人でありたい。差をつけて線をかいても、結局はみんなが進まない終わりが無い未来を完走できない。支しのべるのが友達でも先輩でも、障害者でも犯罪者でもいい。一人一人が手を支しのべて、引っぱっていけるのなら未来の地球はいつまでもありつづけるのだ。